

## 被虐待児のプレイセラピーの研究

— レビューと考察 —

李 明 憲<sup>1)</sup>

### 問題と目的

近年、児童虐待の報告が急増している状況の中で、被虐待児における治療の必要性も高まってきている。このような被虐待児における介入の必要性が増加していくにつれて、効果的な治療モデルに対する吟味が必要とされている。

虐待された子どもの治療については、1970年代までは、加害者である親に重点をおいて行われてきたが、1980年からは被虐待児の治療が並行されるようになった。被虐待児に関する研究が活発になりつつある中で、被虐待児を対象とした心理治療の研究は、被虐待児の複雑な心理的問題に合わせて多様なアプローチを試みるようになってきた。

被虐待児を対象とした個人治療の必要性に対する認識が高くなるにつれて、児童治療のアプローチも急速に変化してきた。1960年代と1970年代に提唱された児童虐待の新しい治療モデルとしては、集団治療、行動治療、家族治療がある (Mc Dermott, 1983)。この治療モデルは親の積極的な治療への参加が要求されたが、虐待した親と虐待された子どもの関係が自己中心的・破壊的な関係を持ち続けているので、治療に否定的な影響があった。よって、治療者は、虐待者である親を治療に参加させる事に消極的になり (Malone, 1979)、子ども中心の心理治療が発展するきっかけになった。

プレイセラピーは、児童の心理治療に一番よい媒介物である (Axline, 1947; Sandler, Kennedy, & Tyson, 1980)。また、1940年代と50年代の児童治療の代表的なアプローチであり、プレイセラピーが全ての児童問題行動の治療に適用されてきた結果、より新しい発展を遂げた。現代、プレイセラピーの技法は以前より精練されてきている。これは、プレイセラピーが児童虐待のような困難な問題に対しても適用可能な治療技法として発展し

たとも言える。

Kaplan, Pelcovitz や Labruna (1999) は、1990年代に被虐待児の心理治療をレビューしている。それによると、被虐待児に実施された多様な心理治療のアプローチの中で、プレイセラピーが一番多く用いられている。ところが、プレイセラピーの研究手法又は評価方法について問題点を指摘している研究者もいる (White & Allers, 1994)。

従って、本研究は遊戯治療の研究手法の理解及び今後のプレイセラピーの課題を探るため、各プレイセラピーの研究手法とプレイセラピー理論による治療目標や治療過程を分析し、検討することを目的とする。

### プレイセラピーの概観

まず、プレイの治療的要因について言及する。Erikson (1964) はプレイの意味について、トラウマティックな経験を熟達させると述べている。また Mishne (1983) によると、トラウマの経験は、安心した条件下で子どものコントロール下にいる時に再演され熟達する (mastery) ために繰り返されると述べている。また、自分の経験として受け入れられないほど極端に外傷的な経験をした場合、繰り返し回想することにより、受動的に受けた事件を能動的な事件に変化することができると指摘している。また、彼らはトラウマを受けた子どもはプレイを通じて象徴的に彼らの危機体験の再構成を繰り返すと述べている。

このようなトラウマを経験した子どもにおいてプレイの治療的な要因を挙げたが、児童の心理治療にプレイを初めて導入したのは、Freud (1946) で、治療者と児童の関係形成のためにプレイを用いた。そして、同年代の Klein (1932) は子どもであっても大人と同様な精神分析治療が可能であると考え、解釈の素材としてプレイを用いていた。

また、Levy (1938) は治療者の構造化したプレイを用いて子どものトラウマティックな事件の再演を促進したが、これが代表的な構造的プレイセラピー (structured

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程 (後期課程)

play therapy) の始まりである。構造的プレイセラピーの治療者は治療目的にあわせてプレイ場面を作ったり、言語的・非言語的表出をため意図的に刺激を与えたりして積極的に治療を導く役割をする。一般的に構造的プレイセラピーに含まれる治療は行動治療、ゲシュタルト、家族治療などであり、短期的で、症状中心的、治療的転移に頼らないのが特徴である。

このような構造的プレイセラピーと治療者の役割が異なるものとして、非構造的プレイセラピー (non-structured play therapy) がある。非構造的プレイセラピーの治療者の役割は、治療の方向や流れをクライアントに任せて、クライアントが導けるように機会を与えることである。Allen (1942), Moustakas (1959) や Axline (1947) が、non-structured または non-directive, child-centered などの用語を用いて行ったのは、非構造的プレイセラピーにあたる。その後、これらの非構造的プレイセラピーを行った研究者としては James (1977), Woltmann (1955), Mishne (1983), Schaefer & O'Conner (1983) などあげられる。

総合的にみると、プレイセラピーは子どもの被虐待経験により発生した感情や記憶を統制したり、感情を表現したり、行動に表出し、熟達感を得るように援助する効果的な方法である。子どもは自分の経験した虐待について恐怖感や不安を持っているので、自分に起きた事件についての感情を表現するためにプレイを行う。プレイセラピーによって、子どもは、不安や恐怖感を与えた事件を象徴的に表現でき、衝撃的な体験を統合し、解決に向かうように援助される。

特に、プレイセラピーは感情をより直接的に表現するために必要な言語的・認知的なスキルを持っていない子どもにも効果的である。また、発達の情緒的に、自己を表現できない子どもでは、自分の感情や恐れを表出し、熟達感を高めるような経験が得られる。

一般的なプレイセラピーの最初の目標は、治療的な関係形成内でプレイを媒介として、問題を持っている子どもの葛藤や不安を表現するように援助することである。けれども、各ケースの治療目標の優先順位は子どもの問題状況の評価により異なる。

以上、プレイの治療的意味やプレイセラピーの歴史的な背景、プレイセラピーの一般的な目標について概観してみた。これらのプレイセラピーの理論的背景を基にして、これからは被虐待児のプレイセラピー研究をレビューする。

## 方 法

1983年から2000年に発表された被虐待児のプレイセラ

ピーに関する論文 EBSCOhost Academic Search Elite (<http://www.global.epnet.com>), National Clearinghouse on Child Abuse and Neglect (<http://www.calib.com/nccanch/>), PsycINFO (<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/PsycINFO>) などのデータベースを通じて、Child abuse と Play therapy の二つの用語で検索した。EBSCO から66編, National Clearinghouse on Child Abuse and Neglect から20編, そして PsycINFO から54編が検索された。それらの中から、プレイもしくはセラピーの用語だけで検索されたものは抜いた。また、過去に虐待を受けた経験のある大人に対する治療論文も除いた。その結果、26編の被虐待児のプレイセラピー論文を収集した。その中には、被虐待児に関するプレイセラピーのレビュー論文が二つ含まれていた。

ここではレビュー論文を除いた24篇のプレイセラピーの論文を用いて次の二つの観点で検討し、分析した。

- (1) 研究方法：治療理論、治療形態（個人か集団か）、虐待の形態（身体的虐待か性的虐待かネグレクトか）、対象者数、事前・事後評価の有・無、フォローの有無及び期間、統制群の有無、治療期間、治療結果、治療者の位置づけ
- (2) プレイセラピーの根拠とする理論背景：治療目標・治療過程

## 結果と考察

まず、(1)の観点である研究方法別についての結果を表1に示した。また、(2)の観点である理論的背景についての結果は表2に示した。

各分析要因を調べる過程で、一部の論文は事例研究の基本である(1)、(2)の要因が完全には揃っていないことが判明した。また、理論的背景、治療目標、治療過程についてもセラピストが用いた理論の背景について表題にのみ言及している論文も (McDermott, 1983; Ciotto & Madonna, 1996; Hall, 1997) あった。

本論文が取り上げた研究の主な理論は Child-centered play therapy, Cognitive-behavior play therapy, Developmental play therapy, Post-traumatic play therapy, Time-limited play therapy, Dynamic play therapy である。

## 研究方法について

プレイセラピーの研究方法の議論点として、単一事例結果をどのように評価するかという点と、単一事例研究の結果を一般化するために、今後どのような研究法が必要とされているかという点がある。また、研究方法の妥

表1 被虐待児のプレイセラピーの研究手法

研究者	治療理論	対象者数・虐待の形態 性的：S 身体的：P 放任：N 情緒的：E	治療目標	事前・後 テスト(T) フォロー アップ(F) 統制群(C)	治療形態 個人 (I) 集団 (G)	治療期間	治療結果	フォロー 期間	治療者位置 づけ
McDermott, J.F., Jr. (1983)	Psychodynamic の変形	1・S・N	問題行動の改善 (遺尿・攻撃性)	F	I	16ヶ月	目標行動達成・友達回避問題残る	2年	Child therapist
West, J. (1983)	Child-centered (Moustakas's)	1・N	行動・情緒安定	T	I	1年	行動・情緒的安定	不明	プレイセラピスト
Mitchum, N.T. (1987)	Developmental	3・S	愛着再形成	C	I・G	10回	家族間協力増加	不明	カウンセリング専攻修士
Perez, C. (1987)	Moustakas's	45・S	自我概念向上	T・C	I・G	12回	個人：集団有意味 差なし統制集団と有意味	不明	社会福祉士
Nicol, A.R., et al. (1988)	Structured	35・N	問題行動改善	T・C	I	10回	有意味	不明	臨床心理士
Strand, V.C. (1991)	Burgess's 変形	I・S	情緒的問題	T	I	不明	情緒的発達	不明	不明
Klem, P.R. (1992)	Dollhouse テクニック	I・S	性虐待事実露出・統制感発達	不明	I	12回	性虐待事実露出・統制感発達	不明	プレイセラピスト
Ruma, C.D. (1993)	Cognitive-behavior	1・S	問題行動の改善	T	I	不明	行動改善	不明	不明
Ciottone, R.A. Madonna, J.A. (1993)	Ginott's と織つ かの理論併用	1・S	自我概念	不明	I	4年	有意味	不明	プレイセラピスト
Marvasti, J.A. (1993)	Post-traumatic	1・S	トラウマの克服	T・F	I	42回	効果的適応	5年	Child psychiatrist
Harvey, S. (1993)	Dynamic	1・S	性的行動	T・F	I	7ヶ月	不明	期間不明	臨床心理士
Griffith, M. (1994)	Child-centered	1・S	トラウマ洞察	T	I	10ヶ月	トラウマ洞察	不明	臨床心理士
Reams, R.A. Friedrich, W.N. (1994)	Time-limited	13・S・H・N・E	適応力向上	T・C	I	15週	有意味な差なし	10週	教育・心理学・修士
Van de putte, S.J. (1994)	Structured	1・S	内的自我の発達援助	不実施	I・G	不明	経験の言語化	無し	不明
Namka, L. (1995)	著者が開発した テクニック	1・S・P	社会的スキル・羞恥感減少	不明	I・G	不明	有意味な効果あり	不明	プレイセラピスト
Cockle, S.M., Allan, J.A.B. (1996)	Child-centered と Jungian の併用	1・S	情緒的・内的自我の治癒	不明	I	不明	有意味な効果あり	不明	プレイセラピスト
Ciottone, R.A. Madonna, J.A. (1996)	Synergistic	1・S	自我発達	F	I	不明	有意味な効果あり	期間不明	不明
Hall, P.E (1997)	Schaefer's	1・S	発達期の問題	T・F	I	不明	有意味な効果あり	期間不明	不明

被虐待児のプレイセラピーの研究

Doyle, J.S. Stoop, D. (1999)	Puppet テクニ ック	1・ S・E・ P	自己破壊 攻撃的行 動	T	I	10回	未解決の 情緒有り	9年	不明
Zion, T.A. (1999)	Client-centered	26・S	情動・自 我概念・ 社会能力 向上	T・F	I	12回	8人変化 無し・8 人有意義 な効果・	2ヶ月	プレイセラ ピスト
Tonning, L.M. (1999)	Child-centered	1・N	関係形成	T	I	25回	中途失敗	無し	不明
Bonner, B.L. Walker, C.E. (1999)	Cognitive- behavior と Dynamie 併用	201・S	攻撃的・ 性的行動 問題改善	T・F ・C	I・G	12回	攻撃性問 題解決	2年	臨床心理士
Yi, J.M. (2000)	Nondirective	1・ N・P	愛着の問 題・喪失 感の回復	不実施	I	11ヶ月	有意義な 効果	無し	プレイセラ ピスト

表2 理論背景別遊戯治療の目標・過程 (O'Conner, 1997)

	Child-centered play therapy	Cognitive-behavior play therapy	Developmental play therapy
目標	子どもが機会的な治療環境を通じてより自己実現化する	子どもの非合理的考え方を修正するか変換する	子どもに核心的自己（外部から自分をコントロールし、守る内的自己）を発展される条件を提供する
過程	<ul style="list-style-type: none"> <li>-受容的, 安全な治療環境提供</li> <li>-子どものプレイ, 言語, 思考, 感情を反映して, 治療者との関係形成, 自己実現化を導く</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>-治療過程を治療者の共感, 受容, 特別なリラックス指示, 言語的受容を通じて体系化する</li> <li>-現実と自分の非合理的な考え方を検討するように助ける</li> <li>-個人は自分の非現実的な考えを意識する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>-子どもは苦痛, 怒りを経験し, 表現する</li> <li>-絵や詩などを通して愛, 権力習得, 楽しみを経験する</li> <li>-治療者とゲームし, 彼らが持ち得る記憶を創造するように助ける</li> </ul>
	Post-traumatic play therapy	Time-limited play therapy	Dynamic play therapy
目標	安全に支持してくれる環境を作っ て, 外傷の象徴的で隠喩的な再 演を通して外傷を理解する	各ケースの現症状問題行動を改善す る	家族がより感情的苦痛を表現するた め意識的なメタボーをつくる
過程	<ul style="list-style-type: none"> <li>-プレイの分析を通じて世界を 自覚する方式を理解する</li> <li>-関係形成</li> <li>-反復プレイ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>-関係形成とプレイする方法を教え る</li> <li>-トラウマの退行と浄化</li> <li>-実際の関係形成をテストし, 衝動 統制と自己尊重感を発展させる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>-家族構成員がより自由に, 一緒に プレイするように助ける</li> <li>-恐ろしかった親密さと関係する核 心エピソード, 話の要素を認識し 始める</li> <li>-プレイのエピソードがカタルシス チックになる</li> <li>-家族構成員の温かさや愛着が出て くる</li> </ul>

当性として治療者の専門的なプレイセラピーの適用も考  
えられる。

まず, 虐待の形態別に遊戯治療を調べたところ, 24編  
の内, 21編は性的虐待か, 性的虐待を含めた重複形で,  
ネグレクトか身体的虐待の重複形が3編であった。適用

対象は性的虐待もしくは重複の性的虐待が一番多かった。  
多くの虐待では, 様ざる種類の虐待が重複して起こる。  
よって, 虐待の種類別にプレイセラピーの特徴を取り出  
す事は難しい。

各プレイセラピーの研究方法を調べて見たところ, ま

ず、個別治療として、単一事例論文は18編であった。他の6編 (Mitchum, 1987; Perez, 1987; Nicole, 1988; Reamsら, 1994; Zion, 1999; Bonnerら, 2000) は3人以上で、多数を対象とした治療形態であった。ところが、その中には、統制群のない多数個別治療の論文 (Zion, 1999) もあった。多数事例研究方法は、単一事例研究方法より短時間で、個別治療の効果を明らかにする。しかし、比較群もしくは統制群のある実験設計であれば、結果評価をより科学的で、はっきり明示できるであろう。また、多数を対象とした治療論文では、対象者数として1980年代は3人から50人以下だったが、1990年代の論文には200人以上の実施を試みるようになった (Bonner, 1999)。これは被虐待児を対象としたプレイセラピーの研究方法として、少数事例研究しかできなかった以前に比べると、研究方法領域の発展を一步踏み出したものだと考えられる。

個別治療形態と比べて、集団治療だけを実施した論文はなく、集団治療と個別治療の併用した論文が6編 (Mitchum, 1987; Perez, 1987; Van, 1994; Namka, 1995; Kapsch, 1991; Bonner, 1999) あった。これは研究の理論的背景そのものに、個別と集団治療の統合を強調しているから、あるいは対象児の治療要求によって決められる部分もあるからであろう。また、その内には、個別治療と集団治療を比較した論文 (Bonner, 1999) もあった。これは個別治療がいいか、集団治療がいいかを比べるもので、治療モデルの効果を比べる研究方法であると思われる。

その他の実験設計として期間限定の治療効果を試みた論文 (Reams, 1994) もあったが、この研究は保護施設における被虐待児を対象して全セッションを15回実施し、10週のフォロー期間をおいて評価した。その結果、治療前後の問題行動の変化に有意な差は見られなかった。このケースは虐待児を対象にしたプレイセラピーの評価の際、生活場面と治療場面による評価の難しさを示す一例でもある。虐待児の保護の面からみると、治療以前に最優先されるのは、安全な居場所の確保であり、保護施設にいる子どもには生活場面自体が治療的意味もありえるので、この研究も生活場面による影響が結果の評価に与えたと思われる。

加えて、プレイセラピーの評価方法として事前・後テストの実施有無、フォローの有無またはフォロー期間から考察してみよう。まず、フォローを実施してない論文や、フォローの有無が不明な論文が24編中、9編であった。

事前・後テストを実施したとされている論文 (表1参照) であっても、事前テストだけ実施し、治療の効果性

を示すともいえる事後テストは実施してなかった論文 (Kapsch, 1991; Strand, 1991; Marvasti, 1993) もあった。この三つの論文の場合、治療評価は治療過程を詳しく述べることで結果の効果性を示す形をとっており、事前テストも治療計画のために行っただけであった。

事前・後テストというのは、各ケースが目指す治療目標によって、実施する評価道具も異なるのが一般的であるが、研究によっては実施した評価方法に関する具体的な記述がなく、評価値だけ示してあるものが殆どである。反面、Ruma (1993) の Cognitive-behavior play therapy を用いた論文では、CBCL (Child Behavior Checklist) という明確な評価道具を示してある。

このような事前・後テストの実施有無はプレイセラピーの理論的背景によって、評価の実施が決められることもあると思われる。例えば、Psychodynamic Play Therapy, Child-Centered Play Therapy, Gasuttal Play Therapy, Adlerian Play Therapy などの理論には事前評価の必要性を強調してないからである (O'Conner, 1997)。

また、1980年代には多くの研究がフォローを実施していないが、1990年代に発表された論文では、大部分の研究が実施している。フォロー期間は研究ごとに異なるが、一番短いものは10週後に、一番長いものは5年後に行っていた。ところが、その中には、フォローは行ったが、フォロー期間については不明な論文 (Harvey, 1993; Ciotton & Madonna, 1996; Hall, 1997) もあった。

これらの点が被虐待児を対象としたプレイセラピーの研究方法における問題点としてあげられる。80年代から90年代の間、発表された論文数が増加しており、研究方法の新しいアプローチが考えられたり、改善も試みられている。しかし、問題となる点は1980年代における被虐待児を対象したプレイセラピーのレビュー論文 (Phillip, 1985) にも指摘されたように、研究の体系的なプログラム、つまりプレイセラピーの仮説の設定や、注意深く選んだ被験者、有効な結果の評価、適切な統制の使用であると述べている。また、White & Allers (1994) もプレイセラピーの理論的背景やプレイセラピストの役割や遊戯治療の道具や形態がはっきり示されないとか、実験計画が不適切であると指摘している。

ここで、今回のレビューでは、プレイセラピーを実施する治療者の資質も扱ってみる。80年代には、カウンセリングや心理学、教育学を専攻した大学院修士課程修了者がプレイセラピーを実施していた。90年代になってからは臨床心理士 (clinician および clinical psychologist) 又はプレイセラピストの職名で実施したケースが増えた。ところが、看護婦、社会福祉士のような職種の

人による治療的なプレイまたはプレイセラピーが用いられたもの (Perez, 1987; Kapsch, 1991) もある。治療にプレイを用いただけではプレイセラピーを行うには不十分であるから、プレイセラピストとしての役割を明確化する必要がある。

今後のプレイセラピーの適切な利用のため、プレイセラピストの専攻分野についても調べた。しかし、論文によって、治療者の職名ではなく、所属機関名を示したりして不明な点が多かった。よって、プレイセラピストの資質については今後の検討する課題として残さざるを得なかった。

### 理論的背景について考察

まず、プレイセラピーの理論的背景によって実施のあり方が異なってきていることがわかる。1990年の前後から、被虐待児のプレイセラピー理論的背景がより多様になってきている (表2参照)。

総24編の論文の中、Child-centered もしくは非構造的アプローチが7編 (West, 1983; Kapsch, 1991; Griffith, 1994; Cockle, 1996; Tonning, 1999; Zion, 1999; Yi, 2000) で一番用いられた理論であった。また2種類以上の理論を組み合わせたのが4編 (Van putte, 1994; Namka, 1995; Cockle, 1996; Bonner & Walker, 1999), Cognitive-behavior, Dynamic, Post-traumatic の理論が各2編ずつで、Time-limited 理論も一編あった。

ところが、ただ研究に用いたテクニックのみ示した論文 (Doyle, 1991) や、理論の説明が何行しか書いてない論文 (Hall, 1997; Strand, 1991) もあった。理論的背景についての説明が乏しい場合、各プレイセラピーが何を目指したのかははっきりしないので、治療過程の理解や治療効果について一般化されにくいと思われる。

そして、プレイセラピーの理論的背景による治療目標をみると、構造的・指示的なプレイセラピーの場合、問題行動改善や同年輩との相互作用スキル向上を通じる社会的適応など、現症状に合わせたもの (McDermott, 1983; Nicole, 1988; Harvey, 1993; Ruma, 1993; Reams & Friedrich, 1994; Doyle, 1999) が多かった。ところが、非構造的・非指示的プレイセラピーの場合は、トラウマの克服、愛着問題、自我発達など発達期的問題に当たるもの (West, 1983; Marvasti, 1993; Griffith, 1994; Hall, 1997; Zion, 1999; Tonning, 1999; Yi, 2000) が多かった。

また、非指示的プレイセラピーと指示的プレイセラピーの折衷したもの (Mitchum, 1987; Perez, 1987; Van, 1994; Namka, 1995; Kapsch, 1991; Bonner &

Walker, 1999) もあった。Rasmussen & Cunningham (1995) は、指示的プレイセラピーと非指示的プレイセラピーの長所と弱点についてレビューし、指示的プレイセラピーと非指示的プレイセラピーの折衷したアプローチが一番効果的であると提案した。

加えて、プレイセラピーの理論の整備は O'Conner (1991; 1997) によりなされ、理論的背景が確実になったのは90年代からである。それとともに既存の理論的背景だけではなく、セラピスト独自のテクニックの開発や既存の理論を修正して適用した論文 (Strand, 1991; Namka, 1995; Ciottone & Madonna, 1996; Hall, 1997) が数多く増えていく状況である。このような結果に基づいて、これからは既存にある理論の修正モデルや折衷モデルの試みが増えていくだろう。それには修正して適用した理論やテクニックの特徴についての記述がかならず伴うべきであると考えられる。

今後、治療的なアプローチとしてこれらの有用性を検討するなら、プレイセラピーの理論的背景を明確化させなくてはならないと思われる。

### まとめ

1983年から2000年までに発表された被虐待児を対象とした遊戯治療論文のレビューを行った。研究方法の変化傾向としては、単一事例や少数事例研究から多数個人治療の実施、多数個人と集団の比較研究があった。また、治療形態もいくつかの理論の折衷や修正または、テクニックの開発などの傾向があった。これは被虐待児の遊戯治療の発展一步とあげられる。

ところが、まだ単一事例の研究が多く、大規模の実験設計の研究が少ないのは、乏しい社会的治療環境の影響もあると思われ、治療・研究できる施設の構築が優先されるべきだと考えられる。また、これから新しいモデル開発やプレイセラピーの研究効果性を一般化するためとしては、研究評価方法に重点を置く実験計画、例えば、理論的背景の明確化、事前・後テスト実施や、フォローの実施あるいはフォロー期間を今までより長くして、これから先の発達の危機を乗り越えていくのかどうかを調べることなどが重要であると考えられる。

### 引用文献

- Allen, E. 1942 *Psychotherapy with children*. New York: Norton.
- Axline, V. 1947 *Play therapy*. Boston: Houghton Mifflin.

- Bonner, B. L., Walker, C.E., Berliner, L. 1999 *Treatment manual for dynamic group play therapy for children with sexual behavior problems and their parents-care givers*. U.S. Department of health and human services administration for children and families. VA: Circle.
- Ciottone, R.A., Madonna, J.M. 1996 *Play therapy with sexually abused children: A synergistic clinical- developmental approach*. New Jersey: Jason Aronson.
- Ciottone, R.A., Madonna, J.M. 1993 Crucial issues in the treatment of a sexually abused latency-aged boy. *Issues in comprehensive pediatric nursing*, 16 (1), 31-40.
- Cockle, S.M., Allan, J.A.B. 1996 Nigredo and albedo: From darkness to light in the play therapy of a sexually abused girl, *International journal of play therapy*, 5 (1), 31-44.
- Doyle, J.S., Stoop, D. 1999 Witness and victim of multiple abuses: Case of Randy, age 10, in a residential treatment center, and follow-up at age 19 in prison. In Webb, N.B. *Play therapy with children in crisis: 2<sup>nd</sup>*. New York: Guilford Press.
- Erikson, E. 1964 Toys and reason. In Haworth, M.R. *child psychotherapy*. New York: W.W. Norton
- Freud, A. 1946 *The psychoanalytic treatment of children*. London: Imago Press.
- Griffith, M. 1997 Empowering techniques of play therapy: A method for working with sexually abused children. *Journal of mental health counseling*, 19 (2), 130-142.
- Hall, P.E. 1997 Play therapy with sexually abused children In Kaduson, H.G., et al. *The playing cure: Individualized play therapy for specific childhood problems*. New Jersey: Jason Aronson. 171-194.
- Harvey, S. 1993 Ann: Dynamic play therapy with ritual abuse. In Kottman, T. & Schaefer, C. *Play Therapy in Action: A casebook for practitioners*. New Jersey: Jason Aronson.
- James, D.O. 1977 *Play Therapy*. New York: Dabor Science.
- Kalplan, S.J., Pelcouitz, D., & Labruna, V. 1999 Child and adolescent abuse and neglect research: A review of the past 10 years. Part I: physical and emotional abuse and neglect. *Journal of American Academic child and adolescent psychiatry*, 38 (10).
- Kapsch, L.A. 1991 A culture of one: case study of play therapy with an abused child. *Journal of pediatric nursing*, 6 (6), 368-373.
- Klein, M. 1932 *The psychoanalysis of children*. London: Hogarth Press.
- Klem, P.R. 1992 The use of the dollhouse as an effective disclosure technique *International Journal of Play Therapy*, 1, 69-73.
- Levy, D. 1939 Release therapy for young children, *Psychiatry*, 1, 387-389.
- Malone, C.A. 1979 Child psychiatry and family therapy: An overview. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 18, 4-21.
- Marvasti, J. A. 1993 Please hurt me again: Posttraumatic play therapy with an abused child. In Kottman, T. & Schaefer, C. *Play Therapy in Action: A case book for practitioners*. New Jersey: Jason Aronson.
- McDermott, J.F., Jr. 1983 Play therapy for victims of child abuse and neglect. In Scheafer, C.E., & O'Conner, K.J. *Handbook of Play Therapy*. New York: Willy
- Mishine, J.M. 1983 *Clinical work with children*. New York: Free Press.
- Mitchum, N.T. 1987 Developmental Play Therapy: A treatment approach for child victims of sexual molestration. *Journal of counseling and development*, 65, 320-321.
- Moustakas, C. 1959 *Psychotherapy with children*. New York: Harper & Row.
- Namka, L. 1995 Shame busting: Incorporating group social skill training, shame release and play therapy with a child who was sexually abused *International journal of play therapy*, 4 (1), 81-98.
- Nicol, A.R., Smith, J., Kay, B., Hall, D., Barlow, J., & Williams, B. 1988 A focused casework approach to the treatment of child abuse: A controlled comparison. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 29 (5), 703-711.
- O'Conner, K.J. 1991 *Play therapy primer: An*

- intergration of theories and techniques*. New York: John Wiley.
- O'Conner, K.J. 1997 *Play therapy theory and practice*. New York: John Wiley
- Perez, C. 1987 A comparison of group play therapy and individual play therapy for sexually abused children, *Doctoral dissertation*, University of Northern Colorado Dissertation Abstract International, 48 (12A).
- Phillips, R.D. 1985 Whistling in the dark: a review of play therapy research, *Psychotherapy*, 22 (4), 752-761.
- Rasmussen, L.A., & Cunningham, C. 1995 Focused play therapy and Non-directive play therapy: Can they be intergrated? *Journal of Child Sexual Abuse*, 4 (1), 1-21.
- Reams, R.A., & Friedrich, W.N. 1994 The efficacy of time-limited play therapy with maltreated preschoolers *Journal of clinical psychology*, 50 (6), 889-899.
- Ruma, C.D. 1993 Cognitive-behavior play therapy with sexually abused children. In Knell, S.M. *Cognitive-behavior play therapy*. New Jersey: Jason Aronson.
- Sandler, J., Kennedy, H., & Tyson, R. 1980 *The technique of child psychoanalysis*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Schaefer, C.E., & O'Conner, K.J. 1983 *Handbook of Play Therapy*. New York:Wiley.
- Strand, V.C. 1991 Victim of sexual abuse: Case of Rosa, age6. In Webb, N.B. *Play therapy with children in crisis*. New York: Gilford Press.
- Tonning, L.M. 1999 Persistent and chronic neglect in the context of poverty-When parents can't parents : Case of Ricky, age 3 In Webb, N.B. *Play therapy with children in crisis: 2<sup>nd</sup>* New York: Gilford Press.
- Van, D.P., Scott, J. 1994 Structured activities group for sexually abused children. In O'Conner, K. J., & Schaefer, C.E. *Handbook of play therapy: Advances and innovations*. New York: Willy.
- West, J. 1983 Play Therapy with Rosy. *British Journal of Social Work*, 13, 645-661.
- White, J., & Allers, C.T. 1994 Play therapy with abused children: A review of the literature. *Journal of counseling & Development*, 72 (4), 390-395.
- Woltmann, A.G. 1964 Varieties of play techniques. In Haworth, M. R. *Child Psychotherapy*. New York: Basic Books.
- Yi, J.M. 2000 Nondirective play therapy with a maltreated child in the process of adoption: Issues of attachment and loss *Dissertation abstract international: section B:the Sciences & Engineering*, 60 (10-B).
- Zion, T.A. 1999 Effects of individual client-centered play therapy on sexually-abused children's mood, self-concept, and social competence *Dissertation abstract international: section B:the Sciences & Engineering*, 60 (4-B).

(2001年9月20日 受稿)



## ABSTRACT

Research on play therapy with abused children  
: A review and recommendations

Myunghee LEE

This article reviews findings and methods from 24 studies on play therapy of abused children published during the past 20 years. Literature published between 1983 and 2000 was reviewed following a systematic search of PsycINFO, EBSCO, and the National Clearinghouse on Child Abuse and Neglect.

This study focused on two aspects that the one is included the duration and type of treatment, type of maltreatment, subject number, pre-post test, length of follow-up, if so, comparison group, the other is included play therapy of background theories with goal and process of therapy.

During the last two decades there has been substantial progress in developing the play therapy approach models associated with child abuse. However, play therapy research studies are relatively rare and frequently have important methodological limitations.

While most studies showed some improvement with play therapy, many had no, or very short, follow-up to see if improvement was sustained. More emphasis needs to be placed on rigorous evaluation and longer-term follow-up of play therapy with abused children.